

「ユニセフ子ども物語」

地球に住む子どものいろいろな暮らしを知ろう



Central African Republic

中央アフリカ共和国



このすばらしくて かんたんなこと!!

ある日の午後、中央アフリカ共和国の小さな村の水くみポンプのまわりでは、順番を待つ女の子たちのおしゃべりで、いつものように賑わっていました。

クレア（17歳）もその中にいましたが、声を張り上げないと皆の話の輪に入りこめませんでした。彼女の声が弱々しいのは、きれいな顔の下のどまわりが大きくふくれ上がっていて、それが彼女の声帯をしめつけているからです。

長い間、村では、これは悪霊によるものだとか、この地域の食物に毒が含まれているとか、その人の行いが悪いかからといった迷信や憶測で説明されていました。

しかし、ユニセフが最近この地域で行ったヨード欠乏症の調査により、こうした迷信や憶測は一掃されました。実はクレアはこの国の60%以上の人々が苦しんでいるヨード欠乏による甲状腺肥大症だったのです。この調査では、クレアのようにのどがふくれた人のほかにも、子どもを死産したり流産した女性たちや、大きくなって言葉が話せなかったり、からだの動きに不自由なところのある子どもたちがヨードの欠乏によるものと診断されました。

海から遠く離れたアフリカ内陸部では、もともと土の中のヨード分が少ない上に、雨期の洪水でそれが流されてしまうので、その土地で育った作物や家畜を食べる人々は、ヨード



©UNICEF/Giacomo Pirozzi

が足りないことが多いのです。しかも、ヨード不足は胎児期～幼児期の子どもに、決定的な影響をおよぼします。したがってヨード欠乏症はこの国だけでなく世界の各地で深刻な問題です。

けれどもこの調査のとき村の人々は同時に、素晴らしいこ



©UNICEF/Giacomo Pirozzi 井戸にディヒューザーをとりつける村の人々

とを知りました！ ヨード欠乏症は治すのはむずかしいけれど、病気の進行をとめることと、これから生まれてくる子どもたちがかからないようにすることはできるのです！

そのための装置は、プラスチックのかごの中に白いうそくの束のように固形化したヨード棒を1年持続できる分だけ入れたもので、ディヒューザーと呼ばれています。これを井戸の底に沈めるとそれが少しずつ溶けて、汲みあげる水全体にヨード分を拡散する仕掛けになっています。

この水を飲み、この水で育った野菜を食べることによって、初期のヨード欠乏症は改善され、今後生まれてくる子どもたちはヨード欠乏症の不安から永久に解放されるのです。

井戸端会議の話題は、明日設置するディヒューザーのことに移っていました。クレアは水くみの番を待ちながら、明日おこる出来事によってもたらされる未来を思い浮かべています。明日以降、この国の多くの男女を苦しめているヨード欠乏症という病気そのものが、“過去のもの”になり始めることでしょうか。これから成長する多くの子どもたちには、明るい未来が約束されたからです。

(Central African Republic Country Kitより 一部改訳)

翻訳ボランティア：岩永啓二氏

